

# 2 分割後期・二次 国 語

## 国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、12ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

## 1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 最後まで意志を貫いて目標を達成した。
- (2) 人類にとつての普遍的真理を追究する。
- (3) 私たちは恒久の平和を強く願う。
- (4) 彼が描いた風景画は秀逸だった。
- (5) 米を炊いて夕飯の準備をする。

## 2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 冬がス|ぎ、暖かな春を迎えた。
- (2) 色鮮やかな花火が夜空を明るくテ|らす。
- (3) テレビがコシ|ョウ|ウ|したので修理を依頼した。
- (4) この秋、新しい音楽雑誌がソウ|カ|ン|される。
- (5) 自分の才能を生かしてハ|タ|ラ|く。

## 3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

大学一年生の高田友恵(トモ)は、空手道部に入部し、同級生の真知子や岡本とともに練習に励んできた。六月末、トモたちは、初めての対外試合で、形かたと組手の試合＊くみてに出場することになった。先に行われた形の試合で負けてしまったトモは、組手の試合の開始を待ちながら、副主将の形の試合を観戦していた。

副主将の名前が呼ばれた。副主将は、どちらかというと組手より形の方が得意らしい。副主将は私のよく分からない、でも見たことのある上位形を行った。ちなみに最初に形の名前を申告してから始めるのだが、大声でしかも早口のため、そもそも形の名前を知らないと聞き取れないことが多い。

ピインと張り詰めた緊張感の漂うなか、副主将が試技しぎを終え、審判の笛が鳴る。フラッグは三本。副主将の勝ちだった。張り詰めていた空気が少しだけ緩み、私は息を吐いた。副主将の形はただきれいで、すごいという言葉くらいでしか、いまの私には表現できなかった。どこがどうすごいのかを見極める目もない。<sup>(1)</sup>今の自分の形をどれだけ直してどのくらい練習すればあの形に近づけるのだろう、そんなことを考えて、ひそかにさつきとは違う気持ちで、もう一度ため息をついた。

結局、仲西先輩は二回戦で負けてしまい、副主将も次の試合で負けてしまった。あれはうちの勝ちだったよ、と副主将の試合を指して主将が言っていたけれど、どういうことだかよく分からなかった。和道の形＊わどうで試合に勝てない、と主将は続けた。和道の形では流れるような動きが美しいとされるけれど、試合ではそれらは評価されにくいらしい。まだ

始めたばかりじゃ分かんないよな、と言って笑った主将は、副主将のもとへ歩いていった。

「ちよっととモ、どこ行ってたの？」

先輩の後ろ姿を眺めていたら、後ろから真知子に呼ばれたので振り返った。

「もう組手始まるよ！」

「え？　もう？」

「形終わったらず組手だつてさつき確認したじゃん！　ちよっとは自分でプログラム見なさいよ！」

「ごめんごめん！　あ、メンホーとかは？」

「もう持ってきたつて。」

焦りからキレ気味の真知子に怒られながら、女子のコートに向かう。

ちよつとみんなで胴当てをつけているところだった。

「これつけるんですか？」

「うん、女子はね。あつちの袋にまだ入つてると思うから。」

「分かりました。」

話には聞いていたが、実際つけるのは初めてだったので戸惑った。見よう見まねでつけてみる。なんだか動きにくかった。上着だけ脱いで道着の下につけるのだが、帯もうまく締まらないし、つけるだけでなんだか緊張してきてしまう。戸惑っているうちにコート係に集合と言われ、帯を締めながら慌てて集まった。赤青に振り分けられていく。今度は三番目で、少しほっとしたけれど、結構あつという間だよ、と先輩に言われて緊張が高まってしまった。

この大会では、女子も男子も有級と有段に部が分かれる。つまり、黒

帯と、それ以外に分かれるわけだ。形とは違い、私が黒帯の有段者にあたることはない。私は女子有級一般の部に出場するわけだが、一般の部は、道場で空手を習っている人か、私と同じように大学で空手を始めた人の大体どちらかである。勝ち目が低いことに変わりはない。この大会は道場の人も結構多いと先輩が言っていたが、小さい大会だと、大体他大学の女子とあたるか、もしくは、ほほうちの部員のトーナメントになることが多いらしい。

並んで正面とお互いに礼をして、さっそく岡本の名前が呼ばれる。運の悪いことに、岡本の相手は、他大学の茶帯<sup>\*</sup>だった。ばたばたしながらメンホーをつけ、形のときのように、相手と同じように礼をしてコートに入る。名前を呼ばれたら大きな声で返事をし、相手も呼ばれて礼をしたあと、お互いに礼をしてコートに入り、足元に引いてある線まで進んだら、もう一度お互いに礼をして審判の開始のかけ声待つ<sup>(2)</sup>。始まつたらとにかく手を出し、ポイントを取つたら審判に礼をして……いろいろ考えていると頭がパンクしそうで、形のときと同じ緊張感で苦しくなつた。岡本は上段突きで一ポイント取つたけれど、結局相手に七ポイント取られて負けてしまった。

次の選手の名前が呼ばれる。岡本が礼をしてコート脇に帰ってきたけれど、何か声をかけている余裕はなかった。自分の試合も、もう少しで始まつてしまうのだ。

「メンホーつけてあげるよ。」

「ありがとうございます！　お願いします！」

ただでさえ、拳サポ<sup>\*</sup>をしているとうまくメンホーをつけられないのに、

初試合の緊張と、メンホーをつけるのが二回目で不慣れだということもあり、困っていたら、すぐに先輩が来てくれた。<sup>(3)</sup>しかし、後ろから思い切りきつく締められると、緊張感がさらに増した。あんなにうるさかったはずなのに、周りの音が遠くに感じる。自分の呼吸だけがやけにはつきりと聞こえた。

「そろそろ呼ばれるよ！」

「え？」

「青、高田選手！」

前の試合はいつの間にか終わり、もう自分の試合が始まるころだった。

先輩に言われてやっとそのことに気づき、慌てて返事をする。相手が茶帯と分かり、さらに緊張した。どこで礼をするかなどまったく思い出せなくて、とりあえず目の前の相手と同じ動きをする。<sup>(4)</sup>礼をして、進んで、礼をして。その間も心臓がバクバクと音を立て続けている。静まれ、静まれ、と呪文のように思ってもおさまらない。もういいやと思ったときに審判が動いた。

「始め！」

相手の選手が構えて、大きな声で気合<sup>きあい</sup>を出した。ああ、動かなきゃと思っ  
て構えた直後に、相手の突きがメンホーをつけたあごに決まる。

「やめ！」

審判の声で我に返った。

「赤、上段突き、有効！」

わずか数秒で一ポイント取られた。あごが痛い。メンホーがずれた。何も考えられない。でもこのコートにいるのは私と相手と審判のたった三人

で、いくらみんなで練習を積んだとしても、今この場で戦うのは私一人。誰かが代わりに相手を倒してくれるなんてこと、ありえないのだ。

「始め！」

「自分から行け！」

審判の声で試合が再開された直後、主将の声がやけにはつきりと聞こえた。<sup>(5)</sup>はじかれたように、私は前に出た。

(片川優子「動物学科空手道部1年高田トモ！」による)

〔注〕形——技を組み合わせた動きを選手がそれぞれ披露し、技の正確

さなどを競う空手道の形式。

組手——二人の選手が互いに技を掛け合って戦い、勝敗を決める

空手道の形式。

和道——空手道の流派の一つ。

メンホー——頭部に装着する防具。

茶帯——有段者を表す黒帯の一つ下の階級の有級者。

拳サポ——手に装着する防具。拳サポーター。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 今の自分の形をどれだけ直してどのくらい練習すればあの形に

近づけるのだろうか、そんなことを考えて、ひそかにさつきとは違

う気持ちで、もう一度ため息をついた。とあるが、「私」が「ため

息をついた」わけとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 副主将の形の素晴らしさを理解しているのに、初心者には分からな  
いと決めつける主将の態度に失望したから。

イ 副主将の形の素晴らしさを実感するとともに、試合会場の張り詰め  
た空気が緩んだことで自分自身も安心したから。

ウ 副主将の形の美しさに感動すると同時に、副主将に追いつくために  
自分が乗り越えるべき具体的な課題を理解したから。

エ 副主将の形の美しさに圧倒されるとともに、副主将にはるかに及ば  
ない自分の技術の未熟さを思い知ったから。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 始まったらとにかく手を出し、ポイントを取ったら審判に礼

をして……いろいろ考えていると頭がパンクしそうで、形のと

きと同じ緊張感で苦しくなった。とあるが、このときの「私」の

様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 岡本の動作を覚えようと真剣に見ていたが、あまりにも速い動きに  
ついていけず、自分に同じことができるか不安になっている様子。

イ 自分の試合だけに集中しようとするものの、格上の相手と戦ってい  
る岡本の試合が気になり、うまく集中できずに焦っている様子。

ウ 岡本を見て自分の試合の流れや作法を間違えないように確認して  
いたが、整理しきれなくなり、混乱して平静さを失っている様子。

エ 自分の試合でどう戦うか作戦を練っていたが、岡本が試合に負けた  
ことで急に現実に引き戻され、今の状況が理解できずにいる様子。

〔問3〕<sup>(3)</sup> しかし、後ろから思い切りきつく締められると、緊張感がさらに増した。とあるが、「後ろから思い切りきつく締められると、

緊張感がさらに増した」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 一人でメンホーをつけられないことに先輩がいらだっているのを感じ、先輩に認めてもらうには試合に勝つしかないと思ったから。

イ メンホーを強く締められたことで周囲から隔絶されたような感覚に陥ると同時に、試合に向けた準備が整えられたことを実感したから。

ウ 自分でメンホーをつけるときとは違う強さで締められたのでつけ直したかったが、時間もないので諦めるしかないと思ったから。

エ 久しぶりにメンホーをつけた感触に戸惑うとともに、先輩につけさせてしまったことへの申し訳ない思いが湧き起こったから。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 礼をして、進んで、礼をして。その間も心臓がバクバクと音を立て続けている。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 相手と自分自身の動きを客観的に比較できるほど冷静になっている。「私」の様子を、順序立てて丁寧に描き説明的に表現している。

イ 試合中の動作を覚えていないことを相手に気付かれても動じずに行動する「私」の様子を、細部までありのままに表現している。

ウ 自分より格上の相手の堂々とした様子と試合の流れも分からず落ち着かない「私」の様子とを、交互に描き対比的に表現している。

エ 必死に相手をまねて試合に臨みつつも動揺をせずめられずにいる「私」の様子を、感覚的な言葉を用いて臨場感豊かに表現している。

〔問5〕<sup>(5)</sup> はじかれたように、私は前に出た。とあるが、このときの「私」

の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 突きを受けてほう然となったが、戦うのは自分以外にいないのだから、余計なことは考えず思い切って相手に立ち向かおうと思う気持ち。

イ 自分一人で相手と戦っている気になっていたが、仲間と一緒に練習を重ねてきたのだから、必ず勝って喜びを分かち合おうと思う気持ち。

ウ 自分のやり方で戦おうとしたが、試合開始直後にポイントを取られてしまったので、ここからは主将の指示どおりに戦おうと思う気持ち。

エ 主将の期待に応えなかったが、もうこれ以上重圧には耐えられないので、一刻も早く試合を終わらせてこの場を離れたいと思う気持ち。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

人を「道具を作る動物」と呼んだのは、ベンジャミン・フランクリンである。フランスの哲学者アンリ・ベルクソンは、ここからさらに、人間的な知性の定義の中心に道具の製作を位置づけた。人は、ホモ・ファベル（工作する人）であることによって、他の動物から区別される。人の知性とは、道具を作るための道具を製作し、そしてその行為を無際限に変化させる能力のことである。（第一段）

この定義で強調されているのは、道具の製作や使用そのものというよりは、それらを作り出す際限のない能力である。サルやチンパンジーもまた、石や棒といった単純な道具を用い、さらにはその使い方を工夫したり伝達したりすることが知られている。人がそうした動物と区別されるのは、人が道具を使用するときに、複雑な心的機能とのかかわりがみられるからだ。わかりやすいいえば、人が道具にかかわるとき、そこには「心」が想定されている。この意味で、技術は、言語とはまた異なる仕方で世界を把握し、そして世界をつくりだす、すぐれて人間的な方法なのである。（第二段）

人類学の分野で技術の問題を正面から扱ったのは、フランスの人類学者マルセル・モースである。モースは、先に引用したホモ・ファベルの定義にふれながら、技術をまずは身体とのかかわりでとらえている。たとえば、歩き、走り、眠るといふ何気ない動作には、目的や状況に応じた特定の身体の使い方がある。枕を使って眠る、ハンモックで眠る、馬の上で眠る、立ったまま眠る、といった具合だ。モース自身は、歩きながら眠ったことがあるとさえ記している。道具の使用に先立つこうした

身体の使い方は、「身体技法」と呼ばれる。身体技法は、目的の達成にとって有効なものであり、また伝承される。（第三段）

これに対して、身体の外側に独立した機能として作り出されたモノを、「道具」、その複雑な構成を「技術」と呼ぶことができる。手で紙を半分に切るときに私たちがする動作が身体技法だとすれば、同じ作業をするためにペーパーナイフを製作するのは、技術（道具）の発明である。（第四段）

技術の特性について、モースは「相互的因果」という概念を提起している。人は、ある動作や技法の延長線上に技術を作るだけでなく、作り出された技術によってみずからが影響を被るといふ、反対方向の関係性に同時にまきこまれているということだ。たとえば、先の尖った石器（尖頭器<sup>とうき</sup>）は、大型の動物を仕留めるために用いられた旧石器時代の代表的な道具であるが、同時にそれは、狩猟という社会的行為を可能にし、狩猟社会が成立するための物理的な条件ともなった。石器やそれを用いた狩りの技術がなければ、人は大型動物を仕留めることができなかつただけでなく、一定規模の社会を営むこともできなかつた<sup>(1)</sup>。この双方<sup>(1)</sup>向に展開する関係性が、モースにとって、人や社会を理解するための糸口となるのである。（第五段）

このとき人は、知性の本質や、動物との本性上の差異を定義することによってではなく、むしろ、技術との関係にまきこまれた具体的な生体機能やあり方として理解されている。技術は、ただ便利な道具であるとか、身体機能を拡張させる人工物というだけではない。また、人は、技術を作ることができる優れた知性を本来的に備えているから人なのだといわなければならない。技術を手にすることで「ヒト」から「人」になったのであ

り、人と技術は、何重にも折り重なった相互的因果の連鎖のなかでしかとらえることができない存在なのである。(第六段)

この相互性は、尖頭器や斧おのといった素朴な技術だけでなく、文字や地図といった、より複雑な技術、そして技術の複合体としての機械やシステムについても、同様に考えることができる。(第七段)

目覚まし時計の音で目を覚まし、電車に乗って通学し、パソコンを開いて課題のレポートを書くといった、そうした日常にも高度な技術は潜んでいるのだが、この明らかに人工的な生活環境を、私たちは日常的に不自然なものと感じてはいない。大雪で電車が止まってしまおうようなときに初めてその便利さに気づくというくらいに、技術は日常の一部となっている。このとき私たちは、技術的な世界でこそ本来の生活をまっとうしているのだと考え、このあたりまえの世界を成り立たせている条件について考えようとしていない。(第八段)

他方で、人や社会は技術によって条件づけられているのだと強調しすぎることに問題がある。たとえば、遺伝子操作によって新しい生命を誕生させることは、現代の技術水準ですでに実現可能である。それにもかかわらず、人の体細胞からクローンを誕生させようという実験が固く禁止されているのはなぜだろうか。人や社会は、無制限に技術によって変えられているわけではないのだ。このとき私たちは、「人の本性」を、技術とは別の位相\*で考えていることになる。(第九段)

技術によって人の生活が成り立っており、同時に、人の生活のなかからその必要に応じて技術が作り出されている。この相互的因果を考えることは、人と世界のかかわりを考えることにほかならない。(第十段)

(中略)

有史以来、技術的な環境こそが人にとつての生きる環境であった。そして、現代に至るまで技術は、その特異な構成において、私たちの環\*世界をあらたに生みだし、また人間性の再定義に関与しつづけている。(第十一段)

もつとも、現代における技術の問題は、それほど悠長な話ではなくなっていることもまた事実である。生命の改変は言うまでもなく、いまでは雲や雨といった「自然現象」ですら、気象工学の操作対象となっている。気候変動や核兵器の使用に関しては、私たちの生きる世界そのものが完全に破壊されてしまう可能性までもが取り沙汰されている。変化を続ける私たちの環世界が、人が生きる世界としてこの先も維持可能かどうか、真剣に問われている。(第十二段)

現代のホモ・ファベルは、ただ道具を作り出しているのではなく、みずからの生きる環世界そのものを次々につくり変え、そしてみずからをつくりあげてきた。その行き着く先のみずからの生命の危機があるのだとすれば、私たちは、ベルクソンが記した「(道具の) 製作行為を無制限に変化させる能力」を、みずからの手でうまく飼いならしていかなければならないのだろう。そこに困難があるとすれば、何よりそれは、そうした英知が、「人の本性」からひきだされるものではなく、技術がもたらす相互的因果のただなかで、変化しつづけるこの世界において見いださなければならぬものだとある。(第十三段)

スマホを手放すことであなただが不安を感じるのだとしたら、それは、スマホがあなたの日常を構成する環世界の一部となり、あなた自身の生を規定しはじめていくことだ。つまり、あなたの身体は、スマホをつうじて変容しはじめていくことになる。スマホが身体を変容させる

なんて大げさな、と思うだろうか。<sup>(3)</sup>けれども、ここまで読み進めてくれば、それが、身体どころか社会を、さらには人と世界のかかわりそのものを変容させる確かな契機となっていることが理解してもらえないのではないだろうか。(第十四段)

(山崎吾郎「技術と環境」による)

〔注〕 位相——物事を観察・考察する際にとる立場や見地。

環世界——生きていく上でかわる世界。

〔問1〕<sup>(1)</sup> この双方向に展開する関係性が、モースにとって、人や社会を理解するための糸口となるのである。とあるが、「双方向に展開する関係性」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 人は身体の外側に独立した機能として身体技法を作り出すが、同時に、身体技法の延長線上に特定の道具を作り出すということ。

イ 人は道具の製作や使用によって社会的行為を可能にしたが、一方で、道具によって社会が一定規模に固定されてしまうということ。

ウ 人はある目的を達成するために技術を作り出すが、同時に、技術の影響によって人や社会が変化していくこともあるということ。

エ 人は新しい技術を無制限に作り出すことができるが、一方で、他の動物が作り出せる技術は身体技法に限られるということ。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 他方で、人や社会は技術によって条件づけられているのだと強調しすぎることにも問題がある。とあるが、このように筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 技術が日常の一部となっていることを当然だと考えてしまうと、現在の技術を進歩させる必要性を感じられなくなり、人が作り出す技術の水準がさらに下がってしまうと考えているから。

イ 技術による人工的な生活環境を不自然な環境だと認識してしまうと、日常に潜んでいる高度な技術の存在を疑うようになり、今の生活環境を否定するようになってしまうと考えているから。

ウ 技術が人の生活や社会の必要性から作り出されたものだと理解してしまうと、あたりまえだった便利さを受け入れられなくなり、人と技術の相互的因果が見失われてしまうと考えているから。

エ 人や社会が技術だけによって成立していると思ってしまうと、技術が人や社会を支配しているかのような誤解が生じ、人と技術との関係を正しく捉えられなくなってしまうと考えているから。

〔問3〕 この文章の構成における第十二段の役割を説明したものととして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べた人と技術の関係から発展して、今後開発が予想される技術の具体例を挙げ、話題の転換を図っている。

イ それまでに述べた人と技術の関係を受けて、現代の技術が直面する課題を具体的に示し、この後の結論へと導いている。

ウ それまでに述べた人と技術の関係から離れて、人と自然現象という別の話題を提示し、新たな論へと展開させている。

エ それまでに述べた人と技術の関係を整理して、現代の技術水準の高さの根拠を示し、論の妥当性を強調している。

〔問4〕<sup>(3)</sup> けれども、ここまで読み進めてくれば、それが、身体どころか社会を、さらには人と世界のかかわりそのものを変容させる確かな契機となっていることが理解してもらえないのではないだろうか。とあるが、このように筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 技術による将来の危機を避けるためには、人と技術との関係を人と世界との関係として真剣に見直すべきであると考えているから。

イ これまでに作りあげた技術を手放すことへの抵抗をなくすためには、生活の中の技術を否定しなければならぬと考えているから。

ウ 人の本性とは関係なく新しい世界を生み出していくためには、技術を無制限に変化させ続けていくことが必要だと考えているから。

エ 新たな道具を継続的に作り続けていくためには、技術によって世界を今よりも便利なものにしなければならぬと考えているから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、筆者の考えを参考にして、「技術の変化と私たちの生活とのかかわり」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や。やなども、それぞれ字数に数えよ。

次のAの文章は、日本の季節に関する対談の一部であり、Bの文章は対談中に出てくる「徒然草」の原文の一部である。また、あとの内  
 の文章はBの現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

**A 森本** 季節というとは私はずい出すのですが、昔から春秋論争というのがありましたね。日本人にとっては春がいいか、秋がいいかという争いでしたが、あれは結局、どういう結末になったのですか。

**佐佐木** 古事記に、秋山之下氷丈夫あきやまのしたひおとこと春山之霞丈夫はるやまのかすみおとこ、つまり春と秋の兄弟がいて、女性をめぐつて争います。そして弟である春が勝つんですね。それから、天智天皇が春の山と秋の山ではどちらがよいかとたずねた時、額田王ぬかたのおおきみが歌でこたえた春秋争いがあります。その時は、秋を勝ちにするのですね。

**森本** その後も春秋論争というのは続くわけですが。

**佐佐木** そうですね。ご存じの枕草子では、勝ち負けではなく、春は曙あけぼの、秋は夕暮れがいい、それぞれに趣きがあるという。そういう形での引き分けがずっと続いてくるのではないのでしょうか。

**森本** <sup>(1)</sup>僕はヨーロッパの詩にそれほど詳しいわけではありませんが、春の曙がいいか、秋の夕暮れがいいかなんてことを問題にするなどというのは、日本人が季節に対して非常に敏感な神経の持ち主なんだなあ、とつくづく思いますね。

**佐佐木** そういえば森本先生は、雪が降ったというだけで、なぜ、わざわざそのことを新聞記事にするのかという話をお書きになっていらっしゃる

いましたね。あれはやっぱり安心するんでしょうね、読者が……。

**森本** 新聞記者になって最初に書かされたのが雪についての記事なんです。雪が降ったなんてみんな知っているわけで、そんなのニュースじゃない、知らないことを知らせることがニュースだと言ったら、知っていることを知らせるのも必要なニュースだと言われましてね。<sup>(2)</sup> そうですね、徒然草にも「雪が降った日の手紙に、この雪をどう御覧になるかという一言も書き添えないような人の頼みなど聞きたくない」とありますね。日本人にとっては、雪が降りましたとか、今日は良い天気ですね、などと季節についての挨拶をすることが、民族の伝統としてあるのでしょうかね。

**佐佐木** そうですね。季節は毎年めぐってきますから、桜など物心ついてから数十回見るわけですけど、それがやはりうれしいんですね。

**森本** 中国では、春秋という言葉に歴史の意味を込めていますが、日本人にとっては春秋、つまり春と秋が一番関心と呼ぶ季節なんだと思います。

日本人が特に自然に敏感だという理由の一つは、農耕民族だからでしょうね。古代ギリシャでも、農事に関しての注意ですが、<sup>\*</sup>ヘシオドスが季節についてかなり詳しく記述しています。ただ、日本人の場合は単に实用だけでなく、季節に何か自分の思いを託すということがあったんじゃないかな。

**佐佐木** そうかもしれませんね。一年がひとつのサイクルになっていて、この時期に何が起き、こちらの時期には何が起こったかがわかれば、いい、十年前、五十年前に何が起きたかは関係がないという。

農耕民族というのは基本的に歴史をそうやって整理するのだそうですが、それが現代まで、なんていうのかな、残っているのでしょうか。ですから、何年前に結婚したかというよりも、その時どういう季節だったかということ記憶していますよ。

(3) **森本** そうでしょうね。特に稲などというのは、苗代にまずおろす、早苗を植える、田の草を取る、それから収穫をする、脱穀をするというふうには、やるのがかなり細かく分かれています。<sup>\*</sup>二十四節季というのは中国のもですが、中国の稲作地帯である江南地方の習慣が、日本にかなり入ってきたんじゃないかなと思います。

それにしても、日本ほど季節ごとの節目に行事が多い民族も珍しいですね。ヨーロッパですと、カーニバルとかクリスマスとか、行事は大変重要な季節の切り換え時だけですからね。

**佐佐木** そこに向けて、何か月もかけて徐々に盛り上げていくという感じがありますね。

**森本** そう、それに比べると日本は桃の節句、端午の節句、七月には七夕があり、八月に入れば立秋で、中秋の名月とか、細かく続きますね。

**佐佐木** それはやはり、季節の景物を題に題詠をしたということと関係あるのかもしれない。<sup>(4)</sup>春にはどういう花が咲くとか、夏はどんな鳥が鳴くとか、季節ごとの題で歌を詠むわけですから、季節を非常にデリケートに見てきたのでしょうか。もちろん、祭りもおおいに関係ありますが。

(佐佐木幸綱、森本哲郎「佐佐木幸綱の世界12」による)

**B** 雪のおもしろう降りたりし朝人のがり言ふべき事ありて、文をやるとして雪のことなにも言はざりし返事に、「この雪いかが見ると一筆のたまはせぬほどの、ひがひがしからん人の仰せらるる事、聞き入るべきかは。返々口をしき御心なり」と言ひたりしこそ、をかしかりしか。

雪が趣深く降っていた朝、ある人のもとへ、言つてやらなければならぬ用事があつて、手紙をやるというのに、雪のことを一言も言つてやらなかった。その返事に、「この雪を、どんな気持で見ているかと、一筆もお書きにならないほどの、心のひねくれているようなお方の仰せになることを、どうしてお聞き入れることができましょうか。かさねがさね、情けない御心です」と書いてあつたのは、じつにおもしろいことであつた。

(新編日本古典文学全集44「徒然草」による)

〔注〕 ヘシオドス——古代ギリシャの詩人。

二十四節季——二十四節気。もともと中国で用いられてきた

季節の区分。立春、夏至、冬至など。

景物——季節の特徴やよさを示す事物。

題詠——事前に題を決めておいて詩歌を作成すること。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 僕はヨーロッパの詩にそれほど詳しいわけではありませんが、とあるが、「詳しいわけではありませんが」の「が」と同じ意味・用法のものを、次の各文の——を付けた「が」のうちから選べ。

ア 今日雨という予報だったが、朝から爽やかな快晴だ。

イ 飼犬と一緒に毎朝散歩することが、私の日課だ。

ウ 大勢の子供たちが、公園で楽しそうに遊んでいる。

エ 川の向こうに見えるのが、私たちが通っている学校の校舎だ。

〔問2〕<sup>(2)</sup> そういえば、徒然草にも「雪が降った日の手紙に、この雪

をどう御覧になるかという一言も書き添えないような人の頼みなど聞きたくない」とありますね。とあるが、Bの文章において「一言も書き添えないような人」はどのような人物だと書かれているか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア おもしろう

イ ひがひがしからん

ウ 仰せらるる

エ をかしかりしか

〔問3〕<sup>(3)</sup> 森本さんのこの発言が、対談の中で果たしている役割を説明

したものととして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 前者の発言から離れて異なる話題を提供するとともに、先に自説を述べることで相手の発言を促している。

イ 前者の発言に対して事例を示しながら反論するとともに、相違点を明確にして話題を展開させている。

ウ 前者の発言の内容をより詳しく説明するとともに、これまでの対談の内容を整理して話題をまとめている。

エ 前者の発言について具体例を挙げて補足するとともに、さらに比較する対象を示すことで話題を深めている。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 春にはどういう花が咲くとか、夏はどんな鳥が鳴くとか、季節ごとの題で歌を詠むわけですから、季節を非常にデリケート

に見てきたのでしようね。とあるが、ここでいう「季節を非常にデリケートに見てきた」を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 自然の移り変わりや特徴、生き物の様子などをきめ細かく捉え、

季節のすばらしさを繊細に和歌で表現してきたということ。

イ それぞれの季節にしか見られない花や鳥を和歌の題材に設定し、動植物の命の大切さを切実に訴え続けてきたということ。

ウ 季節ごとの節目に多くの行事を取り入れて和歌を作る機会を増やすことで、表現や内容を徐々に洗練させていったということ。

エ 季節ごとの天候の違いや、寒暖の差を敏感に感じ取り、農耕民族に特有の季節の節目の行事を丁寧につくり上げてきたということ。

〔問5〕 Bの文中の――を付けたア、エのうち、現代仮名遣いで書いた場合と異なる書き表し方を含んでいるものを一つ選び、記号

で答えよ。